

助手廃業の弁

助手
稲賀繁美

フランス科の助手という、日本に他に例をみない恵まれた環境に、たった二年間ではあったが、身を置く僥倖に恵まれた者として、愛惜深ければこそ、物思うところも少なくない。去りゆく鳥が、もとよりあるもがなの、とやかくやの注文を置き土産に、あとを濁して行くのは、いかにも慎みに欠ける。沈黙あらまほしき所以であるが、この際、助手という立場から見えてきた私見というかおそらくは謬見のいくつかを開陳して、もって、いかに助手の目玉が駒場世界を歪めて見ているか、皆様のご判断の参考にもなれば、と思う次第である。そして歪みを誤解としてお叱りいただくと同時に、何故歪んで見えてしまうかをちょっと考えて戴ければ幸であって、これを望外ならぬ望内の望みとしたい。

自分のことは棚に揚げて、やはり駒場のタイトウという言葉が口をついて出る。めざましいタイトウの後、し

ばらく春風タイトウたる我が世を謳歌した駒場が今日タイトウの兆しを如実にしつつある、というタイトウである。戦後の日本の高等教育における唯一の成功とか称する教養学科のタイトウである。

まず学生さんたちについて申せば、なんのために教養学科を選択したのか、その積極的な意義がどうも分からない。国際関係論のように就職・受験予備校の志向の明確なところや、「教養第一」の多くの分科のように専門大学院に直結する分野は一応論外として、ことフランス科など「教養学科第二」を見ると、どうもモラトリアムとしての消極的選択でしかないような雰囲気濃厚なのである。言い換えれば、地域研究の枠組みがその自己完結性を失いつつある状況が見て取れるわけで、表象文化論の設立も、この崩壊傾向と「相関」する一挿話と形容できよう。武器として外国語を駆使してきた教師の下にもはや同じ武器を鍛練する経験を共有することなく、ひたすらその成果のみを消費する外国語離れた学生を製造する体制が公認の下に導入された訳で、いわば教養学科が自己の再生産を放棄して、異なった方向を模索しはじめた象徴的な事件がここにある。

逆に、フランス科内部においても、とにかくフランス記述してあれば、主題は国際関係論であれドイツ哲学であれ、何であつても構わないといった、かつての寛容さが薄れ、かわつて専門分野の流儀に忠実で、フランス的な論文作法の厳密な適用を学生に命ずる傾向を深めざるを得ぬ状況が見えてきたのも、時代閉塞の象徴であろうか。学生の意欲の低下と指導側の教条化とが悪循環を起さねばよいが、と懸念されぬでもない。

組織の成熟がいわゆるレイト・スペシアライゼイションと背馳するという状況の進展に伴って、かつてならば大学院比較文学比較文化課程に進んだでもあろう、非仏文志向の進学組は、今後は、学部で教養学科段階から、フランス科ではなく、表象文化論分科ないし比較日本文化研究分科のような、細分化された専攻にあらかじめ吸収されるであろう。のこるは大学院の地域文化研究課程に進学する学生である。しかしこの課程は、上述の背馳を解決するべく設置されたにもかかわらず、まさにその矛盾を抱え込んだ結果、みずから問題の塊と化している。この帰結は、フランス科の将来とも無関係ではない。

いったい、学部・学科内部の改革が、意図すると否とにかかわらず、結果として自らの理念を裏切る方向にしか機能しない点に今日の病根の深さがある。これはたん

語を手段として自分の物にしようとする意欲の減退には甚だしいものがある。実際就職組の大半は将来フランス語を生かすこともなく、また最初からそうした意志や希望も欠いている。そもそもそうした特殊職に就く機会そのものが、逆説的なことに、この国際化のうたわれる今日この国において、かつて無いほど限られてきているし、教師の側にも、社会に出る学生がその方向で活躍するなどとは、もとより期待していない風情がある。卒論審査の席で、就職する学生にたいして「もう今後フランス語など使う機会はないでしょうから構いませんが」といった講評がなされると、一体この学生は何のためにフランス科を選び、また教師側は何の為に無駄な努力をしたきたのか、と暗憚たる気分になる。

こうして教養学科の基礎理念の根幹であった地域研究としての外国語教育がその求心力を失ってしまつと、フランス科の残る存在意義は、消去法的に言つて、いわゆる大学院仏文予備的な性格にしか、もはや求められなくなる。というのも、「フランス語を使う」そぶりによって渡って行ける世界はそこにはないからである。あたかもこれに並行するかのような変化が、例えば卒業論文の指導などにおいても現れてきている。フランス語で

に、大学を就職予備的な象徴的資格取得手段とみなす世間の期待に答えようとする対応が、教養学部・教養学科の理念に対する逆風となつたと言つたとどまらない。教養学部自身がその理念を空洞化する専門主義志向に走らざるを得ぬところに、とりわけ教養学科第二および、これと組織的にはいちおう独立しているが、理念と人的基礎においてその上部構造をなす、大学院総合文化研究科地域文化研究課程のかかえる最大の構造矛盾が露呈してくるからである。

大学院総合文化研究科が制度として構造的に持つ根本的な欠陥はいくつもあって、その分析には場を改めねばならない。(その結果以下の文章は腰折れにいじけてしまふのだが……)ここでは、教育研究組織としてその外国人留学生受け入れ体制に、その末端的な難点のひとつを指摘するとどめると、例えば中国、台湾、韓国から多くの留学生が比較文学・文化研究専攻課程に入学しているが、驚くべきことに、彼らと外国語科中国語教室の教官との間にはまったく接触がない。たがいにそうした教官、客員教授、留学生の存在すら知らないのである。責任分担や体面上の問題はとにかく、同じ駒場のキャンパスで同業の士の動向にも無関心であるのが当然といっ

た有り様では、国際交流など画餅に等しいといわねばなるまい。

ことはフランス科の場合も大同小異であって、なんとかフランス科の学生さんたちと地域や比較に居るフランス語圏の留学生たちとに親密で日常的な接触の機会を作りたいと思っていささか努力はしてみたが、制度的な壁が学生さんたちにも心理的な障壁と映るものらしく、なかなか思うようには事が運ばなかった、というのが小生の正直な実感——というか敗北感——である。

とりわけ外国人教師はお客様扱いしてはならず、フランス科さらには駒場の一員として、主体的に活動してもらえないような環境が不可欠である。その点、ドイツ科などでは、教師までも含めたセミナーを週にひとこま実施しているが、どうもフランスは個人主義のお国柄ゆえか相互干渉を嫌うところがあって、実現はなかなかむづかしいかもしれない。むしろ助手や大学院生のレヴェルで積極的に外国人教師の授業に（残念ながらもぐりて）首をだし、クラスに活気をもたらす必要がある。文学テクストの和文仏訳などの教室に闖入して、要らぬ口出しをして掻き回したり、詩の暗唱に苦しむ学生さんたちを横目で眺めてニヤニヤしたり、はてはディクテを一緒に

科の担当をルーティンとして、しかし創造的にこなして戴くのがやっと、といった現状だから、むしろ同じく週一度でも、かえって日本人外国人を問わず、非常勤講師の方たちのほうが、責任の相対的に「軽い」分それだけ楽しみに駒場まで授業にいらっしやる風情である。

もっともこの逆説を解消しようとすれば、いきおい駒場解体論に走りかねず、自分の墓穴を掘ることも明らかだから、これは、もとよりご法度の話題であった。ただ、先生方にもう少し頻繁に研究室に立ち寄って戴いて、気軽にしゃべりでもしていったり戴けるような雰囲気をつくりたかったが、そこはむくつけき助手のこととて、思うに任せなかつた面もあるし、ただでも狭い研究室にパソコンが入って、談話用の空間が占領されてしまったという物理的制約もあった。だが大切なのは機材を増やすことではなく、長年をかけて練り上げられてきた授業経験の秘訣を着実に次ぎの代に継承・発展させてゆく努力であるはずだ。ここにフランス語教室、そしてフランス科の将来に対する一抹ならぬ危惧がある。

その神話時代につづいた英雄時代をあと数年で終えようとしている駒場に、はたしてこれまでの研究・教育成果を拡大再生産してゆく潜勢力がなお期待できるものか、

やってみると、案外助手のくせにできなかったりして、どうしてなかなか愉快で、自分の授業法の参考にもなる。

それでも、いざ助手になってみると意外と小刻みに時間を拘束されるもので、思った程コミットすることができなかったのが、いささか心残りではある。ドイツ人教師フュルンケース氏の啓蒙についてのゼミとドゥヴァンク氏のルソト周辺の思想を扱った授業とに連絡をつけたこと、論文指導の学生面接の枠を利用して助手も交えた討論の場を設けたことなどが、数少ない成果といえれば成果だが、これも公式の慣習として後継してゆく権限が助手にあるわけでもない。かえって、中南米科と隣の表象の研究室で、ミソン先生を囲んでみんな談笑した経験の方が、今も楽しく思い出される次第で、インフォーマルな気のおけない会話の自然発生をこそ旨とすべきなのかもしれない。幸い外国人教師にイニシアティブをとってくれる方々のあるのは心強い。

その際、もちろん理想的なのは、専任の先生方にも、率先してそうしたコミットメントの先導——煽動役を演じていただくことであるが、いかんせん、さまざまな校務にあまりにもご多忙で、これ以上のご無理はとてもお願ひできかねる有り様である。週ひとコマの教養学

それとも既に制度としての耐用年限に達して、その構造的矛盾ゆえにかえて急速に動脈硬化を来しているのか。不安は大きくて、とても「梶とる舟師は変わる」とも「樂天的に希望の歌を口ずさむ気にはなれない。脳裏をよぎるのはむしろ「運るもの星とは呼びびて」「運命ある星の転べは」といった沈鬱の思えばかり。去り行く者としては僭越ながら、せめて「真闇の中に人知れず鳴く鶏」を気取って、もはやその意を「誰か知る」とも定かならぬ末世へのゴロワ風の別れ唄としようか。礎石となるべきペテロは、ことが手遅れになってからしか己れの過ちを悟らぬ定めだけれど、所詮それが文化というものの宿命でもあるのだから、フランス科という鶏が警鐘の役に立ちそこねてこそ、その存在意義も立証されようというものだ。

附 (木) 2019.10
16 流石にこの 2019.10.16

編集後記

「そのアルゴサーティーンてのは何者なんだ」「金さえ積めば世界でも最高のプロだ、デューク本郷の変名で既に駒場に潜入している筈だ」「だが奴は本当に来るのか」「…話を聞こうか」「来てくれたか…依頼というのは、ある本を編集してもら」銃声。「……………」(岡)

芸術のためには人をあやむることさえ厭わぬなどと高言しておりましたが、いまでは夜な夜な枕頭を飛び交う三匹の手首どもにおびえる毎日。一本は助手の稲賀さんの、一本は編集長の岡田氏の、そしてもう一本は「あこれの」森田嬢の。あんまりいじめないでね。(小)

真夏の夜の夢、真冬の夜の悪夢 (平)

この冬は、駒馬のピトレスクな雪景色が見られて幸せでした。ブロック先生が、目を細めて喜んでいらっしやったのが、印象的でした。今度の雨は、雪に変わりそうにありません。春は、もうすぐそこです。(森)

科内定のままお亡くなりになった山之内美和さんのご遺稿は、これを掲載することが申し送り事項となっていながら、諸般の事情で実現できませんでした。また編集作業中にフランス御滞在中であられた支倉先生の原稿は、本来の場所に収めることができず、止むなく先生のご了解を頂いて巻末に収録することとなりました。その他幾つかの順不同も、合わせてお詫び申し上げます。◎皆様からお寄せ頂いた近況御報告に関しまして、紙面の都合もあり、編集部で一部割愛のやむなきに至りました。ご諒承下さいませ。◎また名簿訂正に関しましては、多く卒業生の皆様からお教えを頂いたほか、支倉先生には、ご帰国後のお忙しいさなかにご尽力頂きながら、時間的都合や技術的ミスもあり、そのお力添えを充分には活かせませんでした。今回なんとかデータベース化を目指したのですが、かえって機械にもて遊ばれる結果となり、思わぬ間違いが生じているのを恐れます(現在の学生にはお名前の読み方や進学・卒業年度の分からない先輩のおられることもあり、配列に混乱を来しました)。◎また、手紙をお送りしても、転居先不明で返送されるのでもなければ同封の返信用葉書でご連絡いただくこともできない、という場合が数多く生じたのも、六年の空

名簿に携わった関係でフランス科の方々の名前を多少覚えしました。(ルビがなくて、入力に苦労しましたが。)教養学科図書室の本の裏に見覚えのある名前を見つけて、なんとなく懐かしさを感じる今日この頃です。(村)

編集部の入手した牒報によると、限定海賊版丸秘写真集「アルゴ12½」が昨年晩秋ひそかに出版されたが、駒場某権力の発動により、機密漏洩・肖像権侵害として摘発され、発禁処分となった旨である。裁断をまぬがれた私家版がなお数冊、研究室などに隠匿されて、闇取引可能とのことであるが、詳細は、非合法地下出版につき、不明。証拠隠滅のため発生した殺人事件の証拠物件の一部が本号表紙にそれとなく凶行の痕跡をとどめている。ヨロシク就イテ犯人ヲ搜索セラレタシ。(『海賊船アルゴ号密室殺人事件ノオト』より)

◎御多忙をおして執筆頂いた先生方、諸先輩に改めて感謝申し上げます。校正などの至らぬ所もあろうかと存じ、予めお詫び申し上げます。また執筆の意志を伝えておられながら積み残しとなった幾人かの方々には、この場を借り、切にご海容を請う次第です。とりわけ、フランス

白を経た上では致し方ない事態とは申せいささか残念でした。卒業生の皆様の御意見・情報を得て、次回のアルゴにはより完全でアップ・トゥ・デイトな名簿を掲載できればと考えます。今後とも御協力を仰ぐ次第です。◎「アルゴ・サーティーン」の出版に財政的援助を惜しまれなかつた諸先輩のお名前は、本来巻末に一括記載してお礼に代えるべきところですが、これも今回果たせませんでした。別紙にて収支決済を挟み込む予定です。それをもって御承諾頂ければ幸いです。なお、郵便振込口座：東京5の97633、東大教養学部フランス科アルゴ編集委員会まで入金頂ければ(一口五千元)、追加の御注文にもある程度応じられるかと存じます。配達・連絡不行届きの際はどうか御一報下さいませ。◎あわせて、フランス科創設者を悼む文集『前田陽一その人その文』(東京大学出版会扱い・非売品、495+XXXXVIIII頁)も、一冊送料込み頒価五千元にてお分けしています。郵便振替口座：東京9の368658、前田陽一刊行会(東京大学教養学科フランス科内)扱いです。◎最後になりましたが、編集部のおかない素人仕事で御迷惑をおかけした出版社七月堂の益々の御発展を祈り木村主人、担当の知念明子姉に心からの感謝を。(編集助手)